

## 律宗

律宗は「南都六宗」と呼ばれる、奈良時代における仏教の六大宗派の一つとされています。仏教の戒律の理論研究と実践を重視する点が特徴的な教義です。

南山律宗を開いた唐代（618-906）の僧侶・道宣（596-667）は、同時代の僧侶・玄奘（602-664）がインドから中国にもたらした経典の翻訳にも携わりました。759年に唐招提寺の初代住職となり、日本における律宗の拠点確立した鑑真は、道宣の孫弟子です。続く四代の住職は、いずれも日本国外の出身でありました。

唐招提寺、下野薬師寺（栃木県）、観世音寺（福岡県）の創建を経て、律宗は大いに栄えました。しかし、12世紀に入り宗派そのものが衰退へと迫いやられると、鑑真の没後350年が経った頃には唐招提寺も荒廃が進み、やがて律宗の授戒も見られなくなります。

12世紀後半には律宗を復興させようとする試みが生まれましたが、以前のような隆盛を取り戻すことはできませんでした。明治維新（1861）に伴い封建制が崩壊し、王政復古が宣言されると、律宗は政府の通達により真言宗に組み込まれました。律宗が唐招提寺を総本山とし、独立を果たすのは1900年のことでした。